

「実家農業を継ぐなら兼業ではなくプロ農家に」
～地場産パプリカのパイオニア～

花房 宏俊さん

就農コース第6・7期生（H23年8月修了）

インタビュー：令和4年9月4日



1. 就農・研修をめざした経緯

実家は兼業農家。水稻のみ40aで、家にあった機械はトラクター程度。農業に興味はなかったが、家と田を守っていくことになることはわかっていた。農業高校を卒業したが食品加工コースで野菜栽培経験は殆どなく体験程度だったが、実習は面白く興味はあった。



30歳代前半に父から実家の農業を継ぐことの依頼を受けた。いっそ継ぐなら専業でと考え、家族で相談し農業を勉強し直すことにし、楽農生活センター就農コースに入ることにした。

2. 現在の農業経営概要

平成23年8月研修終了後に就農し、平成24年3月にハウスを建設（5棟・12a）。3～4年目と5年目に段階的に増棟し、現在ハウスは15棟・36a（一部加温設備あり）、パプリカやトマト（ミニ中心）を年2作栽培している。併せて露地はれんこん16aとブロッコリー35aとなる。

就農当初は、オランダから種子を導入したパプリカを目玉に栽培し地場産のパプリカとして好評を得た。

現在は、パプリカと露地野菜を組み合わせている。特に、れんこんは他に商品のない9～12月出荷で人気があるため、来年は36aに拡大する予定である。

現在の労働力は、本人と母、パートで対応している。パートは9名で、1日あたり3～4名に来てもらっている。一般的な求人情報で募っているが人気があり、近所や姫路からの継続雇用者が多い。パートの仕事は午前中（9～12時）が農作業、午後が出荷調製作業で、午前と午後で人が変わる。パート確保ができていく要因は、個々の事情に合わせた仕事時間の設定と余剰野菜を無償入手できることかと思う。

販売は、JA直売所やYストアー、スーパーの産直コーナーで、ブロッコリーは市場出荷している。出荷作業は本人と母、あるいは物流便を利用している。

3. 役職員等

昨年からJAの青壮年部（26名）の委員長を務めており、別に総代は3期目となる。現在は県のJA青壮年部の役員も担っている。役職を務めて良かったことは、信頼の獲得につながったことである。

4. 就農コースについて

就農コースでは、多くの農業の知識を覚えながら並行して就農準備も進めなければならないことになっているため、入校して1年後の就農は無理と悟り、2年間の研修を決意した。

就農コースでは、野菜栽培を実践できたことが有意義だった。2年間継続で研修したことも就農に向けて心づもりと準備がしっかりできた。就農することは決定事項で他に選択肢はなかったため、研修中から具体的に準備ができた。親元就農は農地が決まっている分安心であるが、その土地に合わせるしかないため、その前提でどうするかを具体的に検討することになる。

指導員のK氏には大変お世話になった。1年目は、栽培技術等を覚えることに専念するとともに多品目を栽培した。2年目は、品目を絞って技術習得に努めるとともに、就農計画を詰めていった。

研修期間中はいちごの経営成績が最も良かったが、土耕栽培では腰を傷めやすく、一方、腰の負担が少ない高設栽培は投資が大きいのと栽培ノウハウがなかったため選択しなかった。そのため、研修中の成績が良かった品目から、トマトとパプリカで就農開始することにした。販売は直売所主体だったため、品目を絞りすぎず、かつライバルのいない品目・作型を選択した。

親元就農にしろ独立就農にしろ、本格就農が前提で具体性のあるプランを持っている場合は、2年間の研修が有効と考える（1年目に基礎研修+2年目にかけて実態に近い就農計画作成ができるから）。

5. 就農後の状況

実際就農すると経営規模が大きくなって大変だったが、研修中に指導員の指導に従い、きちんと手をかける栽培技術を習得できた。まずは、基本のとおり実践し、その後に規模拡大に対応するため、省力可能な部分の手間を省いていった。就農コースで基本的技術を習得できていたから対応ができたとおもっている。

大変なこともあった。就農1年目に爆弾低気圧により建設1週間後のハウスが倒壊したが、国の支援金（青年就農給付金 経営開始型 現：農業次世代人材投資資金）を受給していたので助かった。なお、ハウス建設にはリース事業を活用した。

トマトとパプリカは、自身の興味があり、かつ収益の取れるものとして選択し

た。パプリカの培技術については就農コースで基礎を学び、ネットや試験場から情報収集をして取り組んだ。稲美町では実践者がおらず、消費者は食べ慣れていないので最初は売れなかった。新しい事を始めたら、我慢の時期が必要である。徐々に人気になったのは、やはり一般的に販売されているものとは鮮度と味、出荷時期が異なったためではないか。



れんこんは明石で飲食業をしている妻のリクエストで始めた(カフェのモチーフがれんこんだったため)。プラスチック桶栽培から試験栽培し、目途が立ってから近隣の農家から農地を借りてスタートさせた。作業は大変だが、粘土質土壌に適しており、他に出荷のない時期にフレッシュなものを出している。人気があるので面積を増やしたいと思っている。

経営確立のためには、常にネタ探しをして他に競合のない品目や作型を取り入れていくこと、雇用に合わせて年間作業を組み立てることが大切である。

パート従業員の育成に関しては、簡単な作業からスタートし、できることを増やしていく感じで取り組んでいる。



6. 今後の展望

将来的には法人化したい。現在のパートは夫等の扶養に入っており、保険関係はこちらでは労災保険のみ加入している。短期パートではこれで良いが、長期の雇用者もライフステージの区切り(結婚や出産)を機にやめてしまうことが多い。スキルを習得した人を継続雇用するためには、法人化が必要と考えている。

7. 農業を目指す方へ

資材高騰や新型コロナウイルス感染症による経済状況の変化など、現状は就農開始時期として厳しい。それでも就農したいなら、希望者は覚悟をもって臨んでほしい。また、世のトレンドは変わっていくので、研修中に色々とネタ探しをしておくこと。

自分は継承依頼により農業を始めたが、専業農家で生きていくと決めたのは自分。きちんと仕事として取り組む覚悟があり、あきらめずに考え続けてきたのでここまで来た。プロとしてやっていく気持ちがないと失敗する。プロ野球選手を目指すのと同じくらいの気持ちが必要で、好きなだけでは生き残れない。プロ意識を持ち、仕事として取り組み、自分で決めたことには責任をとること。